

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 〔談話室〕 古典籍との出会い

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 針本, 正行, Harimoto, Masayuki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000719">https://doi.org/10.57529/00000719</a>

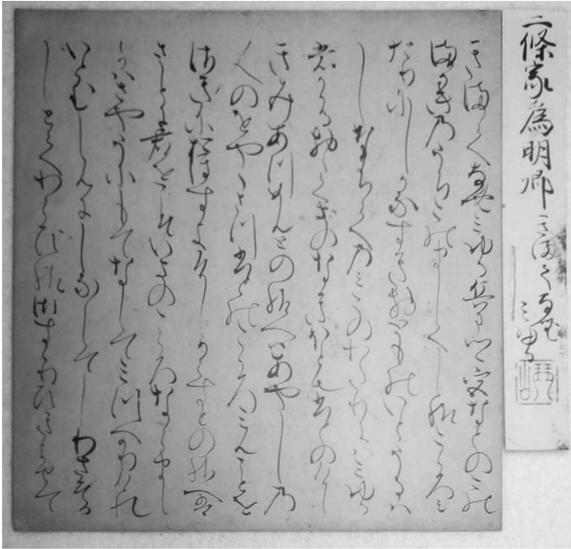
## 古典籍との出会い

針本正行

大学院に在籍していた頃、國學院大學國語國文學會大会において、國學院大學図書館蔵本の特別展示が企画され、徳江元正先生指導のもと、書誌調査にあたることとなった。初めて担当した古典籍が『伝源親行筆 新古今和詞集 二帖』（斑山文庫旧蔵）であった（『日本文學論究 第三十五号』昭和五十年十一月）。上帖の首の遊紙に旧蔵者高野辰之博士の識語があり、「傳東大寺舊蔵」と記され、下帖の奥書には、源親行が八種の伝本をもとに証本を作成したとあった。もちろん親行の自筆かは不明であるが、『源氏物語』河内本の作成者が『新古今和歌集』の書写にも関与していたことは驚きであった。写本にある奥書、旧蔵者による識語などには、当該古典籍の伝来、書写者、伝本の状況などの古典籍文化史ともいえるものが記されていることを実感でき、貴重な経験であった。また、國學院大學図書館には、『新古今和歌集』の写本が十数点所蔵されている。その中に、武田祐吉博士により寄贈された『新古今和詞集 二帖』（巻六、卷十五欠）があり、松田武夫氏が、旧蔵者の一人である保阪潤治氏に宛てた書簡が添えられ、他本には見られない「なぬる夜すゞしき秋風ぞふく」の次にあることを指摘されている。古典籍との出会いは、それぞれの古典籍に関わる研究史をたどることもあった。

最近、源氏物語の古筆切を落手した。古典籍の出会いの一つとして紹介したい。

掲出の断簡は、「伝二條為明筆」の『源氏物語』玉鬘巻の切である。断簡の寸法は、縦十六・九糎、横十五・九糎。椀札に「二條家爲明卿もろあきのみかみ琴山印」(表)、一切 己卯三 了琅印（裏）とある。「五代古筆了琅」(一六四五、一七〇二)生存中の「己卯」は一六九九年にあたる。本断簡は、『源氏物語大成』七五〇頁十三行、七五一頁六行に相当する。内容は、光源氏が六条院に引き取った玉鬘について紫の上に伝える場面である。光源氏は、田舎育ちにもかかわらず優れた素養を持つ玉鬘を蛸兵部卿宮などの好き者の心を惑わす対象にしようとの計画を語る。紫の上は光源氏の発言を「あやしの人の親や」と笑うと、光源氏は硯を引き寄せて独詠する。本文は、いわゆる梗概本切である。〔翻刻〕



の「\*」箇所が、物語の筋に影響がない程度に省略されている。また、本断簡五行目「物、くま」とあるところ、定家本「ものくさはひ」、河内本、別本の陽明本「もの、くさ」、本断簡七行目「ひとのこ、ろみん」とあるところ、定家本「人の心はけまさむ」、別本の保坂本「人の心みむ」とある。本断簡はいかなる本文をもとに梗概化したのであろうか。鎌倉時代の『源氏物語』享受、書写のあり方として興味深い。

〔翻刻〕

きまでなむみゆる（\*1）兵部卿宮などのこの  
 まかきのうちこのましくし給こ、ろみ  
 たりしかなすき物とものいとうるは  
 したちてのみこのわたりにはみゆる  
 もかゝる物、くまのなきほと也（\*2）ひとのけし  
 きみあつめんと給へはあやしの  
 人のをや、まつひとのこ、ろみんことを  
 さきにおほすよけしからすと給へは  
 まことに君をこそいまのこ、ろならまし  
 かはさやうにもてなしてみつへかりけれ  
 いとむしんにしなしてしわざそか  
 しててわらひ給（\*3）御す、りひきよせ（\*4）て  
 \*の箇所、省略された本文を大成本文で補うと次のよう  
 になる。省略のあり方は一義的ではないので、他のツレの調査  
 もふまえてあらためて考えてみたい。  
 （\*1）かゝるものありといかて人にしらせて（\*2）いた  
 うもてなしてしかな猶（\*3）におもてあかみておはする  
 いとわかしくおかしけなり（\*4）給う

（平安時代文学）